竹の山

まれに家 并二

哥と詞を名とせり

[V. 44]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 44
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

蕉十日又夕より廿夕のるすを
うれいげんじのれぞうにもそなれかへりし後の
ひげ黒 ひかうを云之
大殿ひたりにありけるまろごたちのおちとまり
口ノまろき女之
のうれうがとまぐさがたりし並たるハむらさ紀の
紫ハ源ノ程子後ニ中方之也
おなじまろがたちハひげ黒ノ和方ニなるを云之
ゆりにもまぎめれどかれ女どものいひけるも
まろごたちニ
源氏のれすゑぐにひがことどもれまうじまて
冷蕉 むけゆる人ノたりしをこゝろざすなれバ之
ゆるハまれよりもとしれかぎりまり浮けたり
女どもノ云之
けるへのひがことにやなどあやしうりけるいづれ
かはまことなるん内侍のかみのれもしらに和殿の
ひげ黒
れ子ハおとこ三人女二人なんおりしけるをさ殿
ざ殿にうしづきたてんこと紙笑しをきてとし
月のゆるも心得ながり給し程にお人なくうを
ひげ黒ノ

ありけるゆゑりにや。これにもえなつしうきこえ
ゝよひ給ハず。六条院にはすべて御昔にかはらず。
かずまへきこえしなて。失なひなん後のことだ出をき
なへるれそうぶんのふこどもにも。中宮のれつぎに
くまへなりなへれば。右の大臣などは中にそれ
こゝろありて。さるべきありくをとづれ置て給。男
君ハ御元服などして。をれくおとなび給にし
かば。髮おいきで後。心もとなく衣なることもあれど。
をれづゝしありいでなめべかり。姫君こちをいかる
もてなしなんとおぼしこゞろ。うちにも必宮
づへのかいふきよしを。おとゞのそうし垂給

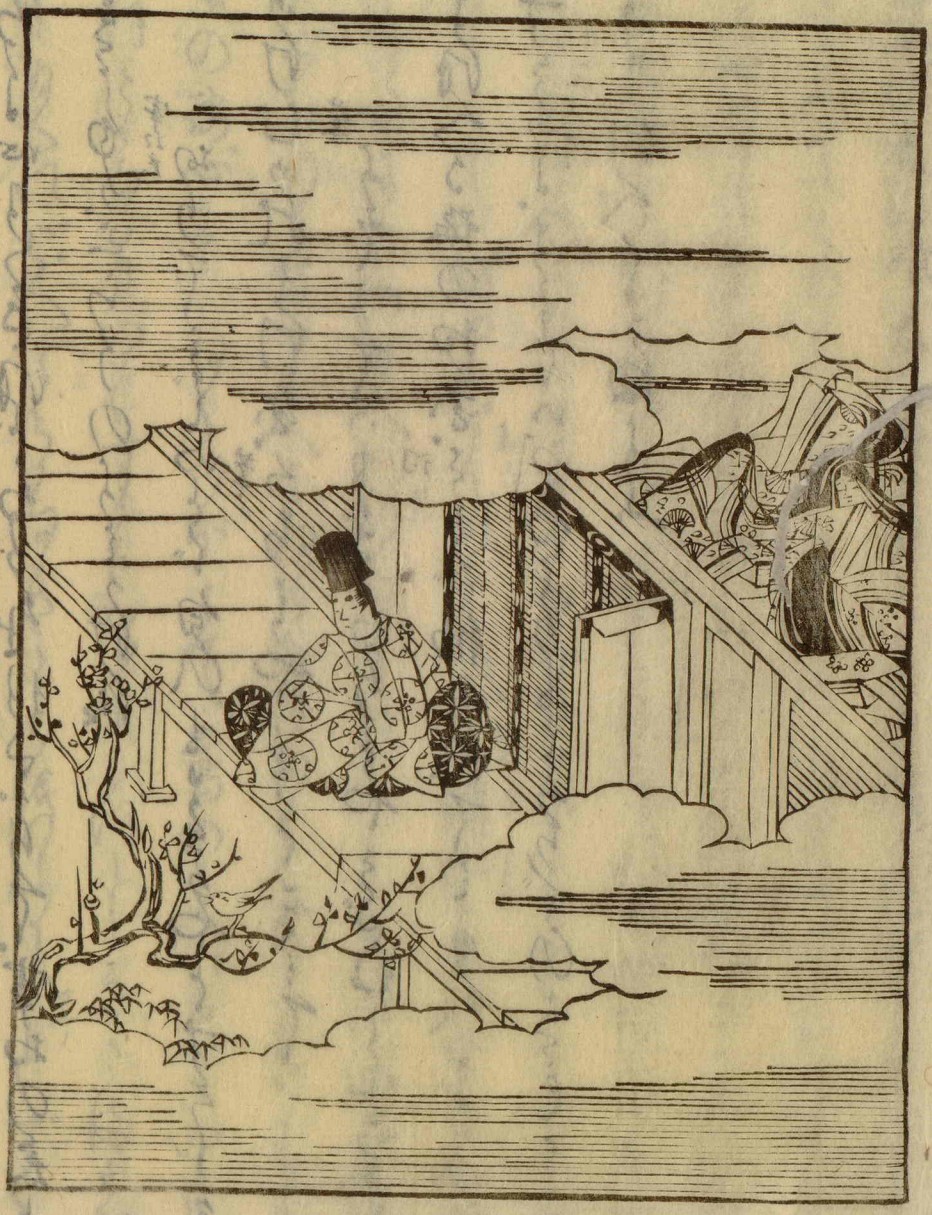
それがおとなびなひぬらんかしと年月ををし
えらせのひておほせごとゝゝずあれど中宮の
いよくなるびなくのこゝなりまさり給ひけるひに
をされてこれ人むとくにもれし給めるかすゑに
まいりてこゝろゝにめをそばめられなんもまづら
たしくまゝ人にをとり数ならぬさ海にてこん
ちゝこゝろげくしなるべき所見しゝもふ次泉院
よりいとわんごろに見しの給ひをてかんの君乃
昔ほいなくてゐしのひしつゝきをさへどりへ
しうしゝ冷しのていまはまいてさゝすぎすさ
まじこゝろさ海にも捨てまふともうしろやすさ

なれば、それぞれのむつびまいりものひきだすも、けだしくもてなすはずなり。女房ともけだうなれまうつ。さてもとくをとりあつめて、ひろうあつまりさんめいうまつりさんぬ。うかさまも私の心ざしをもって、えんのまもそうそうの、雲のたちのぼるがごとくなり。おいとくうろびとあへ、なれどおびゆうすることもやとなん。クおとづれもなければ、娘むすめをだにさしこさぬのみ成ままもおびゆうすることはなし。中のえんをもちんいますまうまれつきうろぐうろ

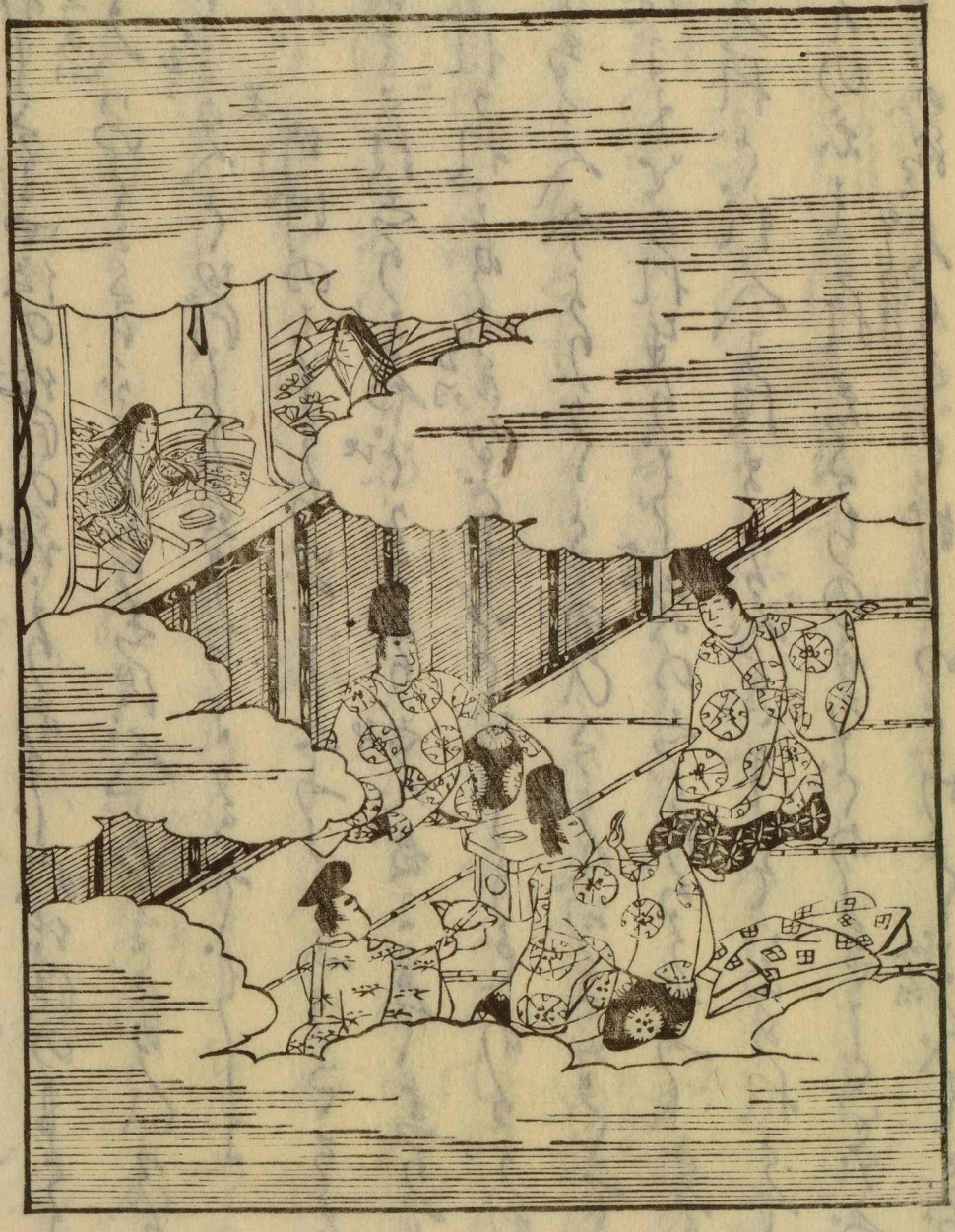
さりけべく。むくつけきまでせんりさよちきこと
とはおぼさるゝど。女がたのこころゆるし給ひぬことれ
まぎれあるハ世のをとこもあまつけきわざなれ
む。（五ノ人ノ事）きこしつゞ人をも。あるしこあやまちひさいげ
なくどの（五ノ）給ふらざされてなん。ひづくしかりけ。
六条（添地）院のれすゑに。朱雀院の（芸）こや。其れ服にむまれ
ゐへりし（蕉）君。冷泉院にれ子のやうにおぼしかしづ
四位の侍従。それ此（蕉）十四ゑばかりにて。いときびつに
おさなかるべきほどよりハこころをきておとなく
しくめやすく人にまさりたるおひさきしるくこゝ
給をかん（五）の君もむこにてもこまほしくおぼしたり。

以(玉)度ハ、坡三条の(女)ゑといとちかき程なれば、さらべき
おりくのあそび所なれば、(玉ノ子達)君ぞ(慧ノ)ひかれてこしおふ
時ぞあり。心まくき女のおりする所なれば、けうき男の
心づかひをぬなり。こしきしがひき後よふ中にかゝ
ちれよさは、これこちさしぬ花人のかねなつしく
心をづしげまてなまめいたりかゝも。これ口位忠
(慧)侍従の所を様に、まゝ人ぞなりけり。六(涼)条院の所
けまひちかうとぶひなすがことなりまやあらん。
世中をなれづしもてかしづれおへる人なり。
けうき人ぞハ心ことまめであへり。(玉詞)人のとれも、げる
よそめやすかれなどのおひてなつしう抱罪をし給

ゆれば、いまし人の此ゆゑも、きこしまほしきおほ
ありおほくすぐし給せるん。[夕ノ手迄]おきを此こだに、さらべきこと
はめしつきせぬ人、必その心ざし此らんぞられ
らと、いましめ給ひど、深く給。[玉羽]今はかく世にあらずぞ
まもあらぬやうにありもありさ雨と、思ひしかぞ
まゐるにあらん。[係ケリ]色にし此こともいとゞ忘れがたく。
せふのへられけるとゝ給けるつゐでなり。[冷]院よりの
さ雨いすること。ほ此めしきこし給。ちかぐ志う
うしろこちきさ人のまじらひは、中こゝぐるしきをと。
なるべ世のへちん見べくふとゝ、うまんぞ。[夕羽]内[全]
おほをしらくこれあるやうにうけ給りしを、いづ



（む）んの恵行くのうらうねぎり出なて（詞）うらそのぞぞち
やまづしげなるまめべとさへよくこそおもなけれ
と思びてのなふなりまめべ（恵ん）とこそつけられれいとくろ
しろ名かれとせひねなへりおるじの（むノ字）侍従殿ぞなども
まぐきねばどころぐもありうでおりしあひたり
をんかうのおしさふろぞうりして、くぐもの
さうづきぞうりさしいでなへり（むゝ詞タ）おとぐいねびまさり
なふまくに（係）お院にいとようこそおぼしまりなへれ
これ（恵）いになへる所もこし語もぬなけいひのいと
しめやかにおまめいろもてなしぞ（係）かの法王か
ざりせひやうすゝかうぞ後にぞおりしかんし



むまやとなん。人ごとゞめきこゝもめりし
あるじの侍従
こけがはよう低かうきじといそぎしをいう
なるかしとさひとまし。げに此かしをもちじめまて。
此恵の御ぎうしにおりしてそしきばこゝろ。かねの
をしたりしもしるく。これ人心よせこゝろを侍従の
恵も。つゝき心ちにちうきゆりまて。明くれむけび
まほしうさひそりやよひに数てさく様あれば
ちりかひくもり。おほかたれ盤なるころのどやうに
おりするところハまぎらくことなく。ちしぢうなる
つゝもあるまじかめり。それころ十八九の御どまや
おりしけん。れかたちもこゝろもべも。さりぐまぞ

おりしき姫（嫡女）君はいとあぎやうまけさうし。いまゝゑ
しきさき殿しのひて。げまゝ人まてこゝ事しが。まげ
ちゝぞこしのふ。様のほそなが。山がきなどの。おりま
あひたる女あひのなつしき程まゝかきなるまゝ
すそまで。おつぎやうのこぼれ落（おち）たるやうなりこゝ也。
れまてなしなどもらうくぢうゝろもげうしき
けさへそひのへり。今ひと（中宮）所はうす紅梅（こうばい）なりれぐし
いろまて。御のいとれやうまゝ紙くとこゝ也。いと
そびやうなまゝめしうすそたるさ殿して。どもり
うま心ふりきけはまさりのへれど。まほひやうなる
けしへはこまなしとぞひとおもへる。碁（ご）うち給とて。

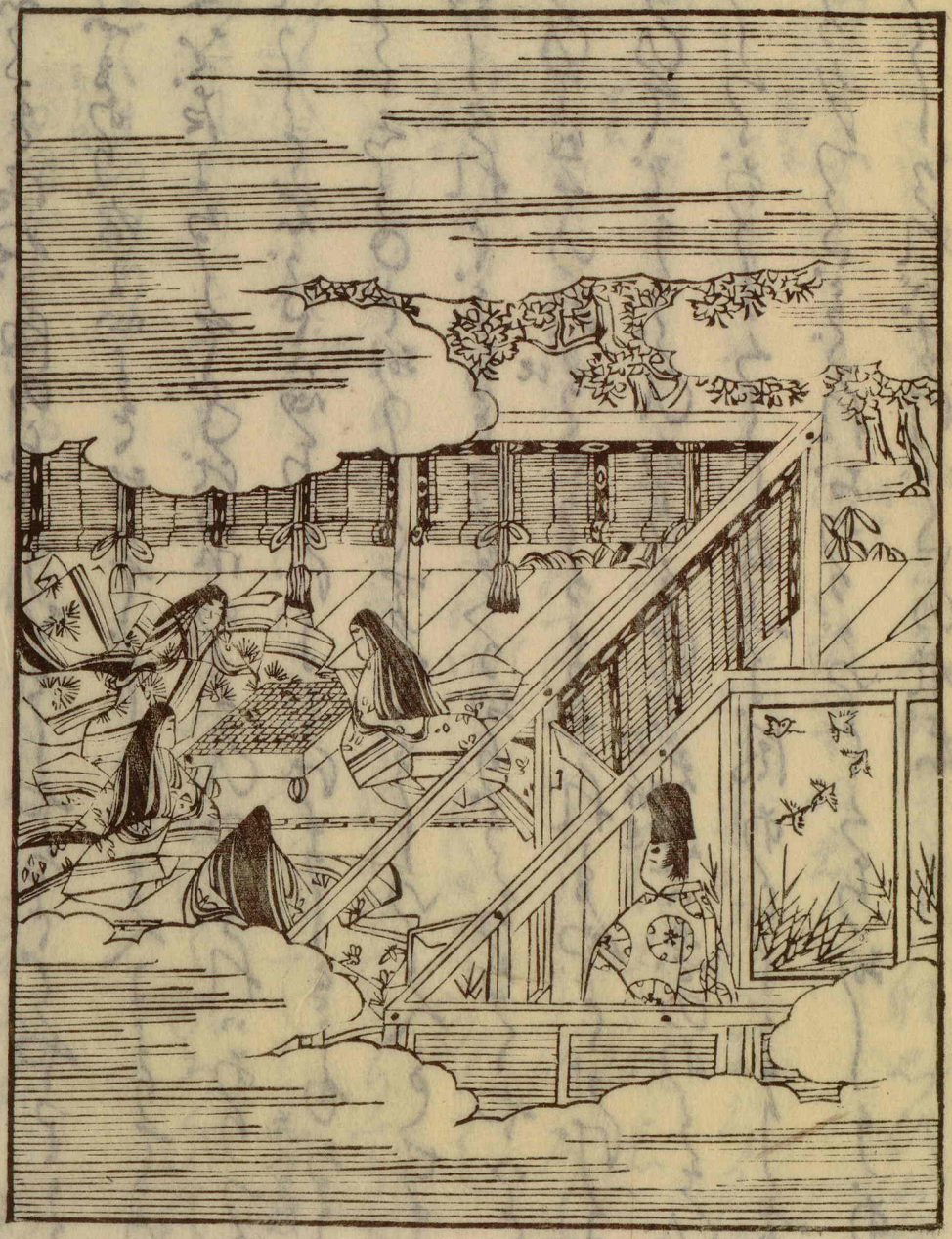
さしむかひ申へる。かんざしはぐしのかたまさ分
さ海どもいとこゝ所あり。（むノ内子）侍従のさゝ。かんぞし給とて。
ちうさふらひ給ふ。（むノ内子 侍従ノ兄之 九近中将 右中弁 二人之）あるゝ君たちさしのぞきぬて。
（詞）ぢゞうのおぼしてこよなくなりにたり。はぐれかんぞ
ゆるされにけるをやとて。おとれくしさき海して
つね付ぬへば。おまへなる人ぞとうつねる給ふ。
中将（九近 詞）宴仕のいそがしうなり侍る。（うとくしきとのん）人にをとり
よろふ。いとはいなきはぐるまとうれへこまへぞ。
弁（右中弁 詞）友ハまいて（姫宮達へ）はうしの宴づかへをそうぬべき
まくに。さのうやハおぼしすてんなど申給。（姫宮達 地）ごうち
さしてもぢらひておいさうする。いとおかしげなり。

〔右近中将詞〕御つゝりなどまうりありけるても。ひげ黒のおりしのさ
ましかばと。ぞふかくしのこそおもはくこそなど涙
ぐみて、まもり給。〔地〕〔右近中将ノ〕女七八の程は他しの人ば。いとよく
そのての。〔ム〕是は〔姫君ノ〕君様がたをいつでいとしへおぼし
なさそしまうくへぞも。されど。〔右近中将ノ〕おもひねのまへま。
〔姫君ノ〕おまへの御の事の。中まも。見ひまうらておもしき
きらしをおしをそては。みのはまでこそなどまで
おそび給を。〔右近詞〕おもむくおもしまし時。是これは
けぞくとおもひあひしなを。〔ひげ黒〕殿も姫君の
御前ぞとさぐめのふ。〔玉〕うへは。〔北の方〕つま君のはあとさぐめ
給しをいとまはなきのさへ◯どやすしずさへ

おへられしいやとて此様の老手に如くけるに付
ても道にけるよしひをもひおへいづれにおまるの人に
をられ給ふけるが方のうれへもとめぐらうことなど
おさまらひしきてしかて例(比)よりはのどやかに
おり寸人のむこにありて今は心もしげりまをこえ給
(左近中将従のむこともあし)
つぬを常に心とめてもおもし給ふ(玉)んの君かくおと
なしき人のおやに如給ふ此年此程もふよりはいと
けうきよげに私さりのはかくちとこえおへり
次泉院のこゝろどはおほくは此(玉)の程の様ゆしう
昔立しう思し出られなれば御まくつけてかはと
おぼしめぐらして姫君の御ことに御おもぼちに

あら給はぞありける。院へ（冷 左近中将同）参り給はんことは此（玉ノ緒道）左道ぞ
ちゝ紙もれくまへちゝさうちこそすべかれ。よろげの
こゝ付るつけたるをこそ世人もゆるすめれ。げり
いとゝなしまほしきれ（冷）ありさ海は此よりまぐひ
ちゝおりしますめれど。さりちゝぬ心ちぞするや。
琴笛のしらべ。鶯鳥の名をも声をもとゝさましたる
がひてこそ。人のこゝにもとまるもれちれ。無定は
いかゞちゞ中ゐへ。いさや（玉行）まじめよりやんごとちゝ
人のかたちしもちゝやうにてのゝ抱しまふ
めれ。こそ。ちゝくにてまじらんは。むつかしく
人けしかれちゝこともやあらんとつましかれば。

それおもをましかば、もすゑのはしくせくも
しらず、こゝ今はかひあるさ由にもてなしのてまし
をなどの給いでゝ、これ抽衣なり、中将などこちのて
後、衣道はうちさしのへるごうち給、昔よりあらそひ
のふさつしをかけ抽にて、こゞんにかぐひとつかち給
けん方に、茶をよきてんとこそふれかりしきこそ
のふくらうなれば、もしちかうてうちまて給、こす
まきあげて、人ごこれいどこねんじ四の西、おりしま
例のかね、侍従の君のはざうしてりきこりかゝ代
うちつれて出給にかれば、大かた人ずくなく局に
ちうの戸のあきこゝろに、やをしらうてのぞきかり。



（五ノ嫡女）さくらゆへ風にそろのさきぐられしひぐ雨
うきさ菜とうるくれ（嫡女）かりこの宰相君
（宰相君）さくとしてかりはちりぬる菜なればまくらぬ
かりさうしとともこずと寄しこすくれは君の姫君
（中宮）かぜにちることはなれつゆ枝ちがらうりろふ
菜をとゞまりしもしじこれ（中宮）かりこのさゆふのさきに
（大輔君）心ありて池の汀におつるもれあはとありても
ワゞこまよれ（池）かちがこのワしまべおりてしまちれ
きこまありきてちりこるをいとおほくひろひて
もてまいれり
（日ノ口へ）おほぞらの風にちれどもさくら菜をれが柄

とぞうきつめてこゝろ。左のあれき

猶栄匂ひあまたにちらさじとおほふぢうりの

袖にありやいふ。うろきばげにこそこゝもめれなどいひ

おとす。くいふに月日もなくすぐしても。ひ来

うしろめたき後。んのとれによろげにおぼして。院

よりはれをうそこ日ごにあり。女はうとくしく

おぼしへだつるまや。うへにうにきそしうとむつか

めりといとまくげにおぼしのゐへば。こゝろふれるも

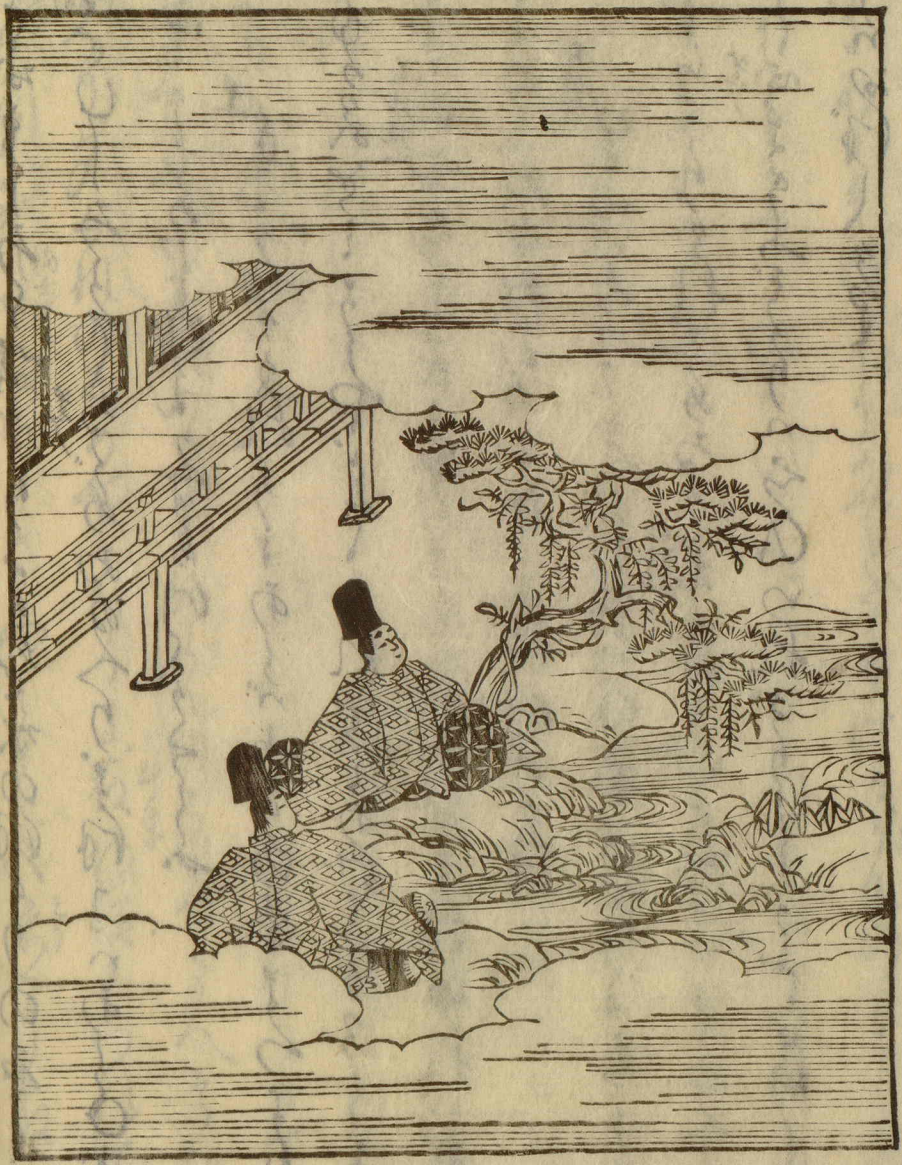
くるしうなん。おなじくはこの比のほどにおぼし

こちらなどいとまめやかにきそしゐふ。さるべきに

こそはおはすしめいとかうあやまくりの給もかく

やきんなどあるを。もて(物をとん)まりてこれば姫(地)ぎこゝふさ而
うちかたらひて。いといたうふけしこまへり。ふる
ひろもろともまなしひのて。中のとぢうり備(つぶそ)ふる。
ましひんぐしをぐる。いといぶをきもれましのひて。
うさこゝるつたりうよひおもするを。よそくまなら
んこと紙おげまてなりけり。こゝろ(嫡女ノ)ことまさて。ひさ
つくろひなりのへるれさ海。いとおりし。とれくれ(ひげぎ)
げしの給しさ海など紙おげしいでく。抱衾なる
おりうしまて。さりてこのふ(茲人ノ多嫡女ノ)おとぐれのるのさづり(ムク)
こちなしびて。これもしげなるれ中まなどうしすぐ
ろごと紙さひいふんとあやしきまも。恨とあるを

がれ侍しましをなどあるまうこそ（嫡女ハ）もいらへをして
げうれ。うきうへでやりつらんよと。うるしげり
見して。抽（比）もれこまいぎなりぬ。おとれ（嫡女ノ女ゞう）ひらしめや
すきうぎりをさくのへこれこり。大方の儀式（ざしき）などハ
内まいり給いましまうそうことなし。先女（こうぎでん）れ出
うるまひこりぬて。かん（ゑ）の君いれ抽紙などこそして給。
東ふけてなん（冷）うへまうのぼりぬひけり。姑（さはき）女出
などこれとしげへてねびぬへるまいとうつくしげ（嫡女ノ）
まて。さうりまこどころあるさ雨をこ（冷ノ）まりぬふを。
などてかをろうなるん。そなやうまとさめきぬふ
こ（冷ノ）人ぞちて。心やすくもてなしぬへるさ雨志もぞ。



（比）これか将（蔵人ノ）のさゝきしもまめやかまいりを
ましとおやまちもしけべくしげ先んる
なくなんおぼしけ（嫡女ハ）宮へ給しへど中の君とうつ
ろふもありかね（蔵人ノ）の君をば母（書ノ）北方のれうしうるより
さもや（玉ノ）とおもほしてほのめしきこゝ給しを
こえて（書ノ）をとづれぎてなりまゝり院（冷）まいれ君（タノ子達）遊も
しくもとよりさふらひなへど（玉ノ嫡女ノ）これまいり
なて後おさく来ゝず まれく母どの方まさし
のぞきてもおぢさなうまげてなんまゝりいでる
（主ム）しちまはこ（ひげ）おとゞの心ざしをさこまへるさ夜こと
なりしをかくひきこゞへこゝ（嫡女ノ）此宮仕をいかなる

よりしなりこれもくびんなしんことにあり
のまくまもいさめこ雨りでいまひきうへし名の
おとゞもひがくしきやうなをもむけての給なれば
ろうしうなん是もさるべきまこそはとなるこゝろる
のみて心もさはがい給ひず（た近中納言）それ昔志れをくせえ
めまえしぬもれなれば今うえしの給えすうを
これは歎ことなるさもいかゞはそうしなをすべき
ことなるん（吟名ノ）中宮をはぐりきえて給とて院の女（こうきでん）
をばいかゞしなり給ひんとすうしろうミやなる
やとかねて気しうはすともさしもえ侍らじよし
ミ字侍らんようおもへば（今上）内は（吟名ノ）中宮おりしますとて

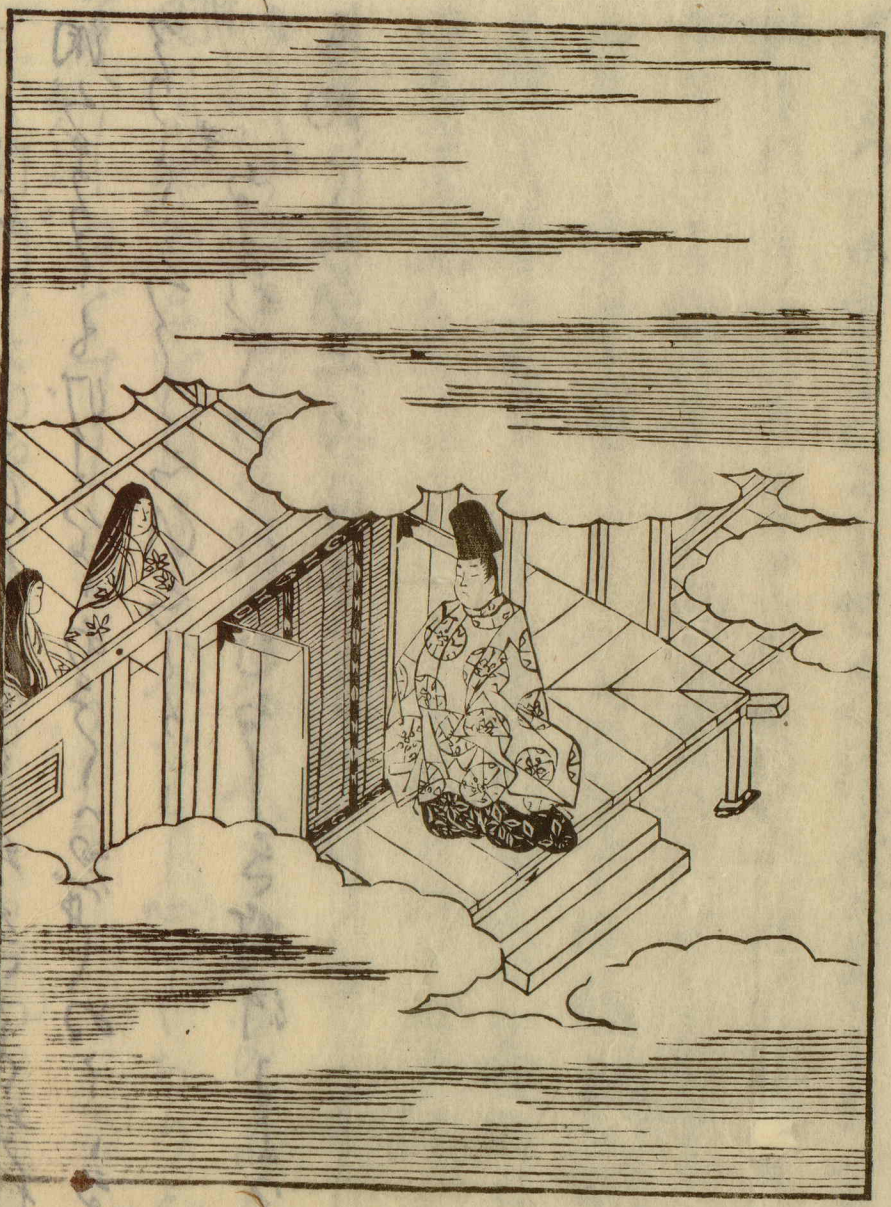
ことへはまじらひ給ひずや。君はつうまつることは
それがこころやすきこそ。昔よりけうあることはは
しけれ。女御（玉ノ嫡女今女御之）はいさくかなることはこぶひめありて。
よろしかんずせひきそ給へんは。ひがこゝろやう
なりなん。世はきくこゝも給へんなど。二所（中務弁）きて
ぬへばかん（玉ム）の君いとくるしとおぼしぬ。さらはかぎり
なきれ（冷ノ）せひのこゝ。月日はそへてまさる。七月より
（今女御）もしこゝ給はなり。うちなやゝぬへるさ夜。げは人志
さ夜ぐはきこしまげしかすもことなりそうし。
いでかはかしんひと紙。なれかはそこさくすぐ
してはやまんとぞおぼゆる。明（冷ノ）これはあそびを

とさせぬひつ。侍従もけぢかうめしいるれば御
琴の音ちまどは宮の給。かれ梅がえにあかきたりし。
中将のおもとれ。和琴もつゝにめしいでゝひかせ
ぬへば宮あたすうにもたゞにはおぼしざりかり。
そのさしかへりて。おとこぐうかきたれかり。女上の
ゆゑ人だの中に。物の上手おほかうころはひちまし。
其中にも。すぐれたるをえらせぬて。此宮後の侍従
太の哥乱ちり。皮蔵人のかね。采人のかずのうちに
ありかり。十四日の月のきれやかにくまりちかさに。
此前より出て。冷泉院にまいり。女御も此こやすぶ前も。
うへにはつぼ。してこぬふ上達アこそちひき

つれて来りける太夫の大夜のちんしの大夜のぞうしを
まぎれて、ここかしこ尋ねけるほどに、かの人は、あまた世
ありところの内のおもかげも、かの隠をかいとりあげ
うちうちとまぎれ、かくして、これ人の君ざまをあくまで
中にも、籠人のかねは、きのぶんうしとおもひやりて、
まげ心あし、自ひもあらくてぐうしきつる崇ものぞ寸
人かぞへてつれて、さ夜もこゝ忽もいとおもしくぞ
ありける。竹がうへて、こもりけれもまつかよう雅、
さえし夜のまどれうしかずびも、さて生くれ
それびびくしもさりべくて涓ぐさり、もの宿の
れ方はまうれどもそこまでこのせので　流

らんぞ。月は東ゆうなるまくりぬりよりも
ましこなるすゑのぼりていかるゝ給へんとのゝ
おぼゆれば。ゆむそらもなうこぐらひありきて。さる
づきもさしてひとりをのゝとぶめしるゝは。面目
なくなん。東一東取ぐまかきありきていとなや
ましうくるしくてゆしこるゝ。深侍従を院より百
これば。あれくるしおぼしやすむべきよとむつり
なぐら来ぬへり。此前のことぐもなどさりを給へと
うへうちなしこる人のさはぐすうつざを。えら
れこる程。心にくりかりとてうつくしと思し
こあり。万長楽をれくちずさひにし給ひしゝやす

だらりのかしはなけれど、[芸心]どちらなきことなれど、
泪ぐまるくもげにいとあさくはなげしぬこゝなり
なりとこゝろしひしらう
[芸]なぐれてのこれめむなしき竹河によつて
き物としひしりまき



もれ（蓋ノ地）あまれなりけるしき後、人ぐ、おしかり、さうは（蓋ノ）
おりこちて、人のやうりもまび給はざりし
うど、人ぎ面のさすがる心ぐるしうゐりなり、うち（蓋詞）
出ゐまてこともそ侍れ、おなかしことてこゝろ得る、
こゝろ（冷ノ）ゐるまとめしいづれば、けし（蓋ム）こゝろき心ちすれど
まいり給ふ、六条院（冷詞）の路哥（さうり）のあしかる、女ぐるまて
あそびきこれけるいと面白りきく、右のおとゞ（タ）の
こゝろれしおまごともかれつゝりのさしけぎ
なるべき人がこゝく女にけるよなりやいと抽のよ（ず）
なる女さへおほくあつまりていかるもうなることも
おしかりかんなど、そしやまて、此（比）こゝとぞ志こゝ

させなて、さうは家を所、琵琶は仙洞にまゐ、和琴をひ
かをなて、此度などあそび給、此息所の此ことの
ね、まゝなるなりなるところありしを、いとよく
そしへないなりなてぞ、いまあらしう仇者よくて、
うゝぞくの事など、ど手にいとよくひき給なる
ごとも心得なくをくれたることは、事なし給ちぬ
人なありぞうちいとおしうなべしと、我こころ
とまるゝやうなるなりなれどをのづからけど
をうしぞ、えぞれ給ふなくなれくしうなどは
恨かけ○どおりくにつけて、さふ心のなぐへるなげ
しさをうすむるもいかゞなげしかんしてぞ

中宮ニ
ゆづり聞えぬふ地おほやけいとかたうし給こと奴なれば
内侍ハ大ゐるノ様之
らしげかう覚しをきしかど、えさだ給はざ望
むノ尚侍ノ宿と
しをこおとゞの御心を覚して久しう奴なり
今上ノ
尚侍ノ
けり。昔の例などひきいでゝ、それことかなひぬ。この
中宮尚侍ノ奴給ふるす
君の御すくせまて、らしげ門ぬひしまかたさ
法人ノ尚侍ノ屋又むノ心ゝ
ありかりとえしたりかくて心やすくて内ずえを
むノ心
中宮ノ
志ぬへかしとおぼすまもいとおしうかねのことを無和
茲人ノ
雲ぬ
の方のけぎとの給し抽をそれぬ聞えしやうに
ほのめし聞えしもいかにおもひ給へんと覚し
あつかふ。弁の君志て心うつくしきやうにおとゞに
むノ子息
夕
聞え給うちかりかり御ぞすのあれば、さ面ぐに
むノ詞
今上

あるがちなるまじらひのこれこと世のきこえも
いかごとせふのへてなん。まづこひぬるときこえ
のへば内の（今上）此気色ハおぼしとがむるもことゆゑ
なんうけ給ふ。おほやけごとにつけても。安づん
し給ひぬハさるまじきわざるなん。ちやおぼし
たりべきるなんと罪人のへり。まこけたびハ中宮の
此そしきとりてぞ（尚侍ノ）条りのふ。おとゞおりせまし
かば。をしけち給ハざしましなど。おもれなるす
ども紙なん。おほ君ハうちなど。名たうおしげ
なりと。（今上ノ）きこしめしをさたりけるを。ひきたがへ給
へるを。なほ心ゆるぬやうなれど。是もいとらうく

しく。うろまくもてなしてさふらひ給。さ紀の
（玉）かんの君かうちをうへてんと覚しうろを。（姫君達）かる
（玉ノ子達ノ詞）がるまあつかひ冥しおふほどまをこなひもうろ
あはくしたうこそおぼされめ。今すこしいづるも
うろのどかまこまりなしおて。もどうしき事なく。
ひとこちまいとめかへと君ぐちの戸かへバ。（玉地）覚し
とぐこほりて。（今上）うちまハ時ぐ悪びて来り給ありも
あり。（冷）院まはいづくりしき出心ぢへのる紙ことまバ。
さるべきありもさしまいり給ちず。（玉心）いましへを
（冷ノ）せひいでしが。さすがまかくじけるうおぼし
うしこまりま。人のこれゆるさぬことませんりし

うちかたらひのて。おもれはのゝ見しまさり。とし
ごろありて。又男みこうゝ給つ。そこらさふらひのふ
れかたぐはかりことなくて。としごろはありは
けりとなろかなるぞりかりれすくもなど。世人おど
ろく。ミかどましてかぎりなうめづらしと。此今宮
とばしひきてしのへり。おりね給ちぬよなるまし
かば。いまかひあらまし。今はなほごともちへなき
よ紙。いと口おしとなん見しけり。女一宮を恨
なきもれはしひ事給しをかくさ聞ぐうつ
くしうて。かずそひのへれば。めづらなりかたまて。
いとことはおぼひたりをなん。女れもあまりかう

めやすくて、よ紙すぐれ人もおほかりし。恨
なきさいたいなくて、家づゝ人のすぢハ、ちひよう
まじきつぎなりけりと、おほうへ（玉）ハなげき給。男（玉ノ娥女ニ地）し
人ゝのめやすくなり（官位）のぼりつゝ、さてもおハせまし
ま、うたもなしぬぞあまたあるや、その中に源（甚）侍従
とて、いとつうひたづなりとしハ、寧和の中ね
まて、まゐりやうほうやと男まくくめでさいがう
なり、げにいと人がら紙もりかる心まくき紙、やん
ごとなきこゝろち、大臣（誰ともかし）のれむすめを心ざしありて
のぬふなりなども、男（甚ノ）いれずなどあるにつけて、その
うしハつう心もとなきやうなりしうどめやすく

ねびまさりぬべかめりなどいひおハさうす。かね（藤人ノ）
なりしも三位の中ねとかいひて。覚しありかたち
さへあらまほしかりきやなどなまごろつきさ
つらまろりべハうち志のびつゝうなさげなるなれ
ありさ庵よりハなどいふもありていとおしうぞ
えしし。此中ねハ（タノ子息 藤人かねこ）れせひそめてし心殺（そ）ぞうくも
つらくもせひて。左大臣（誰ともなし）のれむすめをえたれど。
おきく心もとめず。君のえてなりひたちをびのと。
手なるひまもことくさまもすりハいかにせふやうの
ありハいかなるかん。家（むノ嫡女ん）にあやすげなきよれむつし
さに。星がちに成なひにかりかん（むん）の君せひしやう

此心ぞくまも。先昔の此ことせひ出されてなんなど罪ゝ給。此こゝ忍のあてまあいぎやうつ給。さう後ほしういまめきたり。ふりがたくもおりすうかれ。うれば院のうへはうしゝまふ此心たえぬぞうし。いまつねまことひきいでまひてんとせふ。よろこびなどは心まはいとしもせふまへねども。まづ此らんぞられまこそまいり給れ。よぎぬなどの給はすうはせろかなうつゝまうちかへさせ給まやと申給。かふはさぞすぎまたる身のうれへなど。きこゆべきつねでまもあらずとつゝ給れど。つぎと立よりて後りんことはかたき後。こいめんなくてもたる。

めり。宇治の姫君の心とまりておぼゆるも。かうざ海
なるけさひのおしさぞうしと。さひねぬ人里。
内侍のかみも。これごろまゐでぬへり。こなるかなる
すゝぬへるけさひおしく。大かたのどやかなまゐざ
ふくことなき。此事程どもれ。すのうち心もづくしう
おぼゆれば。うろづるひをられて。いとゞもてしげめ
めやすき氏。おぼうへ。ちうもこましかばと。うち
おぼしなり。大臣殿ハ。ことゞ此殿のひんがしなりなり。
ぞいきやうの恵がれさんぶちなど。何まるつどひ給。
兵部卿宮。左のおぼいとのゝのりゆゝのへりうち。
すまひのあるじなどまれ。おりしまさしをさひ

て。ふのひかりとさうじなり給けれど。白ハおりし
まさず。心よくもてかしづきなふ姫君達を。さうハ
心ざしことよ。いかでかとせひ買ひなつべかめれど。
白 安ぞいかなるよかあらん。此心もとめ給ハざりける。
薫 源中納言のいとゞあらまほしうねびとくのひ。なる
ごともをくれたるかたなく抽しなつ後。取柄 おとゞも
柱柱 小方もめとゞめなひかり。どちりのかくのこしりて。
けちゞふ車のをと。さほをふこゑぐも。音のこと
せひ出られて。これ。これ。これはもれあられまなぶめ給。
蛍 こ安うをなて。程もなくこれ。取柄 おとゞのうらひ。柱柱へ 給し
こと。いとあもけけいやうに世人ハもどくなりし

ぐ。せひもさしぐかくてもれし給も。さすがさな
かくまめやすりかり。さぐめるれ世やいづれかりか
よるべきなどのおふ。左の大夫の寧ね中ね。大飯食也
又の日。ゆふつけてうくまいりおへり。こやもて所望
まおりすると。せふまいとぐ心げさしそひて。おほやけ
のかずまへ給よろこびなどは何も覚て侍らず。まる
くしのせふことかるもぬ歎きのこ。さし月より
そへて。せふおへもかかんかくなきことく。泪をし
のごふもことさしめつたり。廿七八のほどれいと
さりまゐひ。まるやかるかくちしくまへり。
こぐらしの志ぐちの世中をこころのまくまをごろ

てづきくらねをばなるまもしいぶ。ゑしいますがらふ
や。右衛（ひけづ）おりをましかバ。こゝなる人（むノ子を）ぞもかゝ事すき
ひごとにぞ心いそぐしましとうちなげきぬふ
右兵衛督（左近中将ノ子）。右大弁（右中弁ノ子）にてこれ非参議（ひさんぎ）なるをうれい
しとせんり。仍従ときもめりしぞ。此比以中将
ときも事。さしよもひの程いかゝ且なるしねど。
人にをくらとなげきぬんり。宰相（ムクノ子息宮位ノすこしよりを云ん）もとくつき
づきしく

69038
6 AP78